

グースに於ける農村人口の配置（オルン、G.L.）は兩地の地質地形の差異より其農村の形分布に差異あることを指摘せり。「海峽陸道の地理的方面」（フォックス、G.L.）は英佛海峡の底には地質時代の河跡あり、此部分には深けれど他は一般に浅く、地質は不透水性の白堊層なれば鑿道開鑿を可能なりと結論せり。阿弗利加方面に於て「セチガルの乾燥」（ウーベル、アンナル）は此地方に鉄分の沈積多きを理由として其急激に乾燥しつゝあるを指摘し、ハイアトラス旅行（ドーグラス、G.L.）は氏が千九百十一年にアトラス山地を旅行したる記行、「摩洛哥に於ける佛國の成功」（レオド、同誌）は佛國勢力の進展を説き、ザンパツコンゴ分水界（スチール、同誌）ナイルコンゴ分水（クリスチー、同誌）は共に中部阿弗利加未探極地の地理を明にせり、其他獨領に關する論文亦少からず。兩米に就ては「南秘魯のアンデス」（パウマン）は一九一一年エール大學旅行隊の報告の一部なり、「中央亞美利加」（ケーベル、S.L.）は其沿革より一般地理と英國の勢力とに及ぶ、火山地震の叙述は特に注意すべし、「英領哥倫比亞州の經濟上資源」（アンステッド、G.L.）は鑛産水力農牧適地等の將來利用し得べき資源を擧げ、「英領ボンチエラス」（スウェーデン、同誌）は從來よく知られざりし同州の地理を明にし、「加奈陀の天産と其國家管理」（メーテン、G.L.）は天産の無盡藏な

るを説きて之を國家管理とするの必要を説けり。兩極地方に於て「ウエツタル海」（ブルース、同誌）はウエツタル海の氣象及鹽湖の結果等を擧げたり。（下田）

彙報

●近衛公爵家古文書記録類の展觀

昨年十月廿日近衛公爵家に於ては、其所藏の古文書、日記類の展觀を、東京華族會館に於て行へり。當日の出陣は何れも同家の顯藏にかゝるものより其萃を集めたるもの總數四十一點皆是れ稀觀の翰墨にして、大卷小冊一大偉觀たるの感あり。今其中の主要なるものを擧ぐれば、第一室日記類に於ては、御堂御曆日記廿九卷は、即ち御堂關白道長の日録にして、其中十三卷は實に自筆原本なり、他の卷亦宇治關白頼通の寫す所と傳へらる。此日記、世上流布のものは僅少の零本たるに過ぎずして、希にある障寫本の如きも此自筆本によつて、補訂すべきものあり。其他後二條關白記卅卷、猪熊關白記十五卷、阿屋關白記愚管記、四十七卷、後法興院記三卷等近衛家代々の日録を初めとし、平親信記、行親記、知信記、時信記、人事記、永昌記、愚昧記等平安朝末期の日記あり

るを説きて之を國家管理とするの必要を説けり。兩極地方に於て「ウエツタル海」（ブルース、同誌）はウエツタル海の氣象及鹽湖の結果等を擧げたり。（下田）

就中人車記は、近衛忠通の家司たりし平信範の自筆にして其紙首に平重盛、源賴政等の筆蹟を有せり。第二室文書及び古筆類に於ては、元慶五年藤原氏女高子の奥書ある不空誦索神咒經の珍奇を初めとし、其外道風、行成、公任、佐理の管贖と、傳ふるもの、又第三室文書古筆類に於ては後朱雀院後鳥羽院の宸翰、熊野懷紙にては後鳥羽院、藤原家隆、寂蓮の三幅及び藤原忠通の消息、藤原基後の朗詠抄斷片等あり。

●故文學博士河合弘民氏舊藏朝鮮圖書古文書

先きに逝去せられたる前京都文科大學講師文學博士河合弘民氏が約十年間朝鮮京城にありて苦心蒐集せられし朝鮮圖書古文書全部は遺族及び令兄河合林學博士の希望により之を京都帝國大學に譲り受くる事となれり。其朝鮮書籍は八百二十二部二千六百九十九冊、文書は百五十五部にして一部數通のもの少からず、圖書文書共に博士が精撰蒐集せられたるものにて其書珍籍甚だ多し、今圖書中主要のものを擧ぐれば、東國輿地勝覽寄本十冊は其初刊本にして弘治十五年權鈞への内賜本なり、又三國史記中の若干冊は正徳慶州刊本にして、所謂「加賀本」なるものと同じく、且其の缺卷を補ひ得るが如し、其他にも鵝洲雜錄綱抄政院日記嶺營日記粟里歌錄海錄外蠻錄宣廟中興志林下叢話看羊錄潘行錄の類亦稀觀

の珍本なり。而して六位厩園條の冊子は他に類なき原本とす。文書中には壬辰風從功臣功錄清皇帝諡林慶榮詔の如き無比の珍品あり。其他各種の文書大抵備らざるなく、博士の旁搜驚くに堪へたり。而して是等の圖書文書には博士の書き入れあるもの少からずして其精圖研磨せられし好紀念たり。尙ほ詳細は他日本誌に紹介せんことを期するものなり。(今西)

●第四回大藏會

第四回大藏會は神宗及び天台宗の主催にて、昨年十一月二日午後一時京都市公會堂に於て開催、顏輝筆三尊像前にて、讀經、献茶式、臨濟大學長齋藤龍戒師の表白文朗誦ありて、後同會の辭、(齋藤龍戒、陳列品に就て、)妻木直良、方冊大藏經に就て(園田宗忠)大藏會所感(盧津實全)の講演あり、翌三日京都府立京都圖書館に於て陳列品を一般に觀覽せしめたり。陳列品には第一門大藏經版本にては、例の如く支那、朝鮮、日本と、各時代の彫版大藏につきて其標本を示せるものなるが、支那彫版中にて開寶七年版は第二回大藏會の際發見せられし珍書にて、爾來各本山の經藏を精査せるも、更にその類本を得ることなし。仍てこの佛本行集經卷第十九の一帖は、正に我が南禪寺經藏に有する唯一稀觀の秘本にして、現在にては宇内唯一本と誇稱し得べし。次に同じく宋

版大藏中、東禪寺版と開元寺版との二種は、共に福州の影造なるより古來只一個の福州版として一副の宋版とのみ考へられしが、近來識者の間に兩寺別々の大藏影版を遂行せしに非ずやとの疑問を生じたり。然るに今回陳列せられたる支應首義の第一卷は、南禪寺本と智恩院本と兩本あり。南禪寺本は崇寧二年（西紀一一〇三年）福州東禪寺の影造に屬し、智恩院本は福州開元寺鋳版であり、年時明記なきも、他本より推して東禪寺本より二十年後の影刻なること明白にて、其字體内容共に大同少異にして同板異印に非ることも明白となり、是にて宋版大藏中の一疑問は全く冰釋せられ、同州内にて僅少の年時を隔て、兩副の大藏を彫刻し互に磨滅缺卷を防ぎしものと察せらる。而して我が醍醐山寶庫に藏する俊乘房將來の宋版は八分迄は東禪寺版に屬し、智恩院輪藏中の宋版は七分迄開元寺版に屬することは、是の影造史上の事蹟を明示するものといふべし。併せて從來弘教書院の四本對校の縮刷藏經は、尙ほ未だ對校せざる、福州版の宋版二種あることを警告し更に又其の量に於ても是の福州本は共に五百八十二函ありて、かの思溪版より十八函即ち約百八十卷多く此に缺けたりし宗鏡錄大慧語類等の禪籍及び天台三大部の如き浩瀚なる東土撰述の書が、二十年前に成功せる。福州宋版中に既に包容し居れることを知り得此他、碇砂版は從來元版と信ぜられしが、余輩の探査する所にて

は既に宋の淳祐年間より着手して元の至大年中に成功せるものにて、約六十年間を経て完成を告げしこと明白となり。されば宋版の標本は今日手にし得べきものは、開寶勅版を第一とし、東禪寺版開元寺版、思溪版、碇砂版の順序にて五種を得べし。次に朝野部に入りては、高麗版は新舊二回あること余輩が既に研究發表せる所なるが、今回の陳列に、南禪寺所藏の舊版と、外に參考として泉涌寺所藏（寺内山より宮内省に獻上し宮内省より泉涌寺へ納めし現存法印寺版）の新版とを併列し、而も「御製秘藏證」第二と支應首義卷六とは同本を併陳して、文字の出入及び體裁の相違を一目の下に瞭らかならしめたり。次に大藏部中の雜部として參考陳列せる中に隣華院所藏の活字本大般若經は、寺傳にては脇坂家の寄贈にて征韓役分捕品と稱すれども、是れこそ從來首義等の疑問とせし日本大藏都監影造の奥書ある活字本零本（今回舟橋氏の出陳せる玄師隱陀所藏經とその用紙と活字とを同じくせるものにて、隣華院に六百卷全部所藏せることは、全く今回の發見と稱すべく是にて天保版以前、慶長年間に業既に活字大藏試作の舉が、いかほご迄進行し居りしかを知らしむべき究竟の材料と稱すべし。此外に我が天保安政年間に大藏對校の大業を完成せし丹山師の功業を語るべき對校寫人名錄四冊あり。（福井淨得寺藏）又妙心寺の了堂和尚が開藏拔萃の事業を完成せる開藏大觀百十三

冊同じく妙心寺の學僧として有名なる無着道忠師が大藏中の疑點を訂正せる閱藏校疑三冊は今日の如く各種の異本を手にすることを得ざりし時に、早くもテキストの正確を志せる篤學の狀を想ふべく、無門和尚の寫大藏完成の事業と共に妙心寺派に於ける大藏篤學の三幅對と稱すべし。法金剛院一切經會次第は新らしき書寫とはい、文徳天皇時代に行ひし一切經會の式を詳密に記せしものにて、大藏會の好參考たり。

第二門寫經部に入ては唐代の古筆として石山寺所藏の釋摩訶衍論は智恩院所藏の海龍王經と同型の物といふべく、泰和二年金永濟の筆になる大字の高僧傳第十四と共に特に人の注目を惹けり。稀觀の祕籍として内容の尊重すべきは大治三年筆の貞元目錄出經大綱最勝王經羽注を最とすべし。

第三門の天台部にては、宋版の台宗十類用革論は内容外形共に珍とすべく、寫本の大原四十帖決、理趣經註、は台密の祕籍としてその出現を祝すべく、達磨大師胎息決も新發見といふべく、特に傳述一心戒文は傳教大師全集中に附録せらるる雖も通行版本そのまゝの編入なるゆゑ、誤脱讀むに堪へず人をしてその書の價值すら怪まじめしが、この古寫は平安末期に成れるものにてたゞにその誤脱を補訂し得るのみならず、上卷の奥に智證大師が長安に於て實見せし僧官の編目、市街の位地等を詳記せる二紙の長卷ありて史家の參考に資すべく、從來の刊本に見るべからざる所とす。

悉曇藏八帖は國寶に編入せられし觀智院所藏本に比すれば筆寫の年代は二三十年を後るとはいへ、彼は僅に二帖あるのみ、是は殆んど全備すと云ふべし。八家祕錄は資菩提院本と比較して共に現存中の最古本に屬し、その内容を異にして通行本を訂正すべき所甚だ多し、法華相對抄また千觀の抄として完本の發見は今回を始めて。

第四門の禪籍に入ては、殆んど五山版の佛書は大抵その尤品を網羅すといふべく、彼の古刻書史が儒佛を混じて百三十五點を掲げるとに比すれば、今回は佛書のみにて百七十三點を蒐め得たるは過半久原文庫の恩恵なりと云へ、その勞は多とすべし。此五山版中に面白きは、玄巖法印句讀刊行の詩人玉屑が、そのまゝ朝鮮に翻刻せられたることと、南堂錄の奥書に依れば、是書の文字は悉く日東北丘海壽の筆に成るものにて、彼の山東省に存すといふ元代日本僧の筆になる碑文と共に、我が國人が書道の上に就ても聊か意を強くするを得るものといふべし。元亨釋書の古刻は京都帝國大學圖書館に藏する永和三年版に比して字稍や細にして瘠せ、體裁も帖本となりて六行十七字なり。寺傳にいふ貞和刻本といふは眞なるべく正に室町時代に貞和、永和、貞治、至徳の四刻ある中最古の刻本といふべし。冥樞會要は宗鏡論の援萃と云へ從來

傳本稀にて、第二回大藏會に羅振玉氏の宋版陳列せられしが、今回五山學の出でたるは大いに珍すべし。予の所藏に寛永剞劂本のあり、これ亦た稀本なり。その他大學僧傳の五山版は今度始めての出現といふべく、その内容は奈良の東大寺文庫の寫本に依て經藏に納入せらるるも、五山時代既にその刻あるは珍すべし。宋版の覺和可語錄宗派圖共、現在に於て唯一本を推すべし。碧巖の各版、宗派圖の各版、殆んど古版の類を盡せるはさすがに禪家の主催と首肯せらるべし。寫本部の中蘭漢を始め、虎關、一休、岐陽、天隱、守仙、南化等名家の墨蹟多き、他に見るを得ざる所なるべし。白丈清樹雲桃抄は新發見といふべく、道忠無着の大原錄、月航錄、大慧書楞栴珠等以下九部の著述は悉く他に版本なき益の書といふべし。虎關、策彦の肖像、その他鐵山同門疏中に見ゆる快川紹喜の署名捺傳は、衆人の眼福を喜びし所なり。〔會眞妻木直良氏報〕

●京都帝國大學特別講演

京都帝國大學に於ては第二十四回特別講演を昨年十月十一日より數回に渉り毎週金曜日開催せられ、文學博士原野耶氏は「世界大戰」と題し前年同博士の演ぜられたる「戦時の歐米」の後を承け露國の革命、革命後の露國及び其外交、聯合諸國の大勢、

第四卷 彙報 京都帝國大學特別講演

英國の國情、西部戰線、參戰後の米國、獨逸の國情、獨逸與國の形勢、講和運動に分つて最近に至る迄の狀態を講述せられたり。

●京都文科大學史學科國史學生修學旅行

京都文科大學史學科國史學生は昨年十月三浦教授指導の下に、奈良縣下に修學旅行を行へり。今其行程をここに報告せんに、十月二十五日午前七時五十分京都驛發、一行は學生桑原、鈴木、入部及び橋川、源の外中村副手、下、學士も行を共にし、吉野口驛よりは宮城學士特に参加せり。汽車は朝霧こむる南山城を通過し、大和平野を双眸に收めつ、五條驛に下車したるは既に正午を過ぎたりき。こゝにて宇智郡役所より特派されたる五條女學校教諭田村吉永氏の出迎を受け、同氏の東道にて驛より十八町吉野川畔の榮山寺に至り、先づ庫裏にて文書を閱覽せり。永祿二年の大和國符案、長元九年の榮山寺牒永承五年の榮山寺牒を初として江戸時代に亘るもの數十通あり。此地方に於ける莊園の沿革と其兩朝の勞働内より島山氏に歸せし徑路とを知るの外、長祿三年に於ける莊民の寄合箱、文明十二年の山林の留木、同濃頂賴支の文書は共に一行の興味を惹けり。庭前に此附近より蒐集せる文明、永正の銘ある墓石を立つ。境内には弘安七年の七重石塔婆、延喜十七年の道澄寺鐘及び建築史上有名な八角圓堂あり。夕陽西山に傾く頃寺を辭し、歸途宇智河の河床に下りて古京遺文にて知られ

たる磨崖碑を見、これを撮影して蕪暮紀ノ川の廣潤なる夕映を浴びつ、五條町の宿舎に投ぜり。

翌二十六日は午前六時五條を發し、吉野川橋上の霜を踏みて山路を過ぎ賀名生に至る。此間約二里強。舊家堀氏を訪ひしに、門前吉村寅太郎皇居の額々掲ぐ、同家の留守居なる竹林氏よりこの附近に散在する正平の銘ある金石文につきて聴取し、二百十人塚と稱する延徳三年の銘ある墓石の拓本を見たり。安政六年以來の來賓姓名録一冊中には癸亥の秋(文久三年)こゝに至れる天誅組の浪士倉田剛太郎以下十七名の署名を留む。寶藏に入れば磐珪禪師の筆に係る賀名生邑略記、賀茂季鷹の筆に成れる賀名生堀又左衛門山緒書あり。享保十九年八月堀平兵衛の斷書に據れば吉野皇居の時堀氏の祖先吉野の郷士として御太刀御旗を賜はりしとの傳説により爾來代々帯刀し來り當時百姓の身分なれば、村方にては帯刀せざるも、外出の日には帯刀すを見つ。されど其家の皇居たりしことをいはずるは注意すべし。猶新に雜古文書を容れたる箱より文祿四年の賀名生内和田村御檢地帳一冊を發見せり。一行は堀氏を辭して黒木御所址と傳ふる丘陵を過ぎ、北畠親房の墓にし、五條に出で、汽車にて吉野に向へり。六田渡を越ねて吉野神宮に詣つ。同地の郷土史家中岡清一氏一行を待たれつ、ありき。こゝにて傳學團は親王筆の實城寺の吉野行宮址扁額を見、

藏王堂に至りて金峰山寺の什物を見る。金峰山秘密傳後水尾天皇繪旨其他勸進狀三卷埋經函等あり。斯くて喜城院に投じ夜は同院に藏する大坂役及び修驗道に關する文書を見たり。

翌二十八日は夜來の雨に心を惱ましたりしも、次第に雲霽れしかば吉野山中を巡覽せり。先づ吉水神社に至りて文書を閲覽せしが、其中正平六年以下の繪旨、文觀上人の繪旨の添狀、足利義輝豐臣秀長の勸進源、上野宮與同の文ある應永十五年の衆議、徳川光圀の對伏尊殊に注意に上れり。次に塔尾御殿を拜し、如意輪寺を経て水分神社に赴く。樓門社殿は神輿其他と共に桃山時代の遺物にして壯麗なり。書を偲ばる。國寶の神像等あり。それより世尊寺址の保延六年の銘ある鐘千手院址の宗信の墓を経て竹林院に至り、有名なる庭園を見、櫻本坊にては國寶となれる釋迦像地藏菩薩像役行者像の外多くの優秀なる彫刻を見たり。其中神童三軀の佳作なるを認めてこれを撮影せり。竹林院の弓馬大概三冊、櫻本坊の日雄寺系統記一卷亦史料に供すべし。一行は又到る處其地勢を踏査し爾朝五十七年の皇基の築るところについても得るところありしが、盡きぬ名残を惜みて下山し、午後九時無事歸路せり。

● 史學研究會

例會 大正七年九月廿八日午後一時半より文科大學第九教室に於

て開催し左の講演ありたり。

一、禁裡供御人に就きて

會員文學士 中村直勝君

室町時代の記録史料に屢其名を現はせる近畿に散在せし禁裡供御人は大部分其起源を奈良朝又は平安朝に歸せる後世の偽作文書を所有せり。其二三の例としては粟津供御人、今宮供御人、近木供御人等を擧ぐべし。しかも彼等の朝廷との關係は其所有文書が謀作されし年代よりも古く、平安朝又は鎌倉時代にありしなり。

然るに南北朝又は室町時代に於て假作されし文書を所有するに至りし由來は如何さて、新しく採訪したる近江菅浦文書を引用して説明し、要するに彼等の獲得したる特權を保護せんがためにして莊園及座の研究と併せ考ふべきなり云々。(當日供御人關係の古文書を陳列展観せり)

一、朝鮮併合事情

會員 小松 綠君

本雜誌雜纂欄に掲載する所なり。

當日は朝鮮併合の事情に精通せらる、小松氏の東京より入洛講演ありしこと、來會者場に溢れ、非常の盛會なりき。散會後學生集會場に同氏を主賓として有志の晩餐會を催せり。

第十一回總會 十一月九日午後一時より京都帝國大學々生集會場にて開催せり。今回は特に東京文科大學教授坪井博士の來會講演せらるあり。偶惡疫猖獗一般の集會を鎖すの時なりしも熱心なる

來會者五十餘名、先づ桑原庶務會計擔任の報告ありて後、左の講演ありたり。

一、化學上より見たる東洋上代の文明

理學博士 近重眞澄君

西洋に於ける近世化學の發達は十八世紀の末十九世紀の初期にあるも、其の淵源する所は十六世紀以來の仙術にして、更に仙術の淵源する所は四世紀に盛なりし錬金術なるが、錬金術は已に早く紀元前六百年代に亞刺比亞人によりて埃及より傳へられたるものにして、埃及にては紀元前二千年頃迄溯り得べし。此に比較すれば東洋の化學も決して遜色無く、日本に於ても延喜式倭名抄等に藥名見、刀劍精練の術は紀元前八世紀に遡り得べく、支那の化學亦西洋と無關係に濫觴し、紀元三世紀の葛洪の抱朴子より溯りて錬金術の開祖老子に至り、周禮考工記の記載を信用すれば更により古代より其の隆盛なりしを知るを得べし。元々仙術に細丹法と理論の二方面ありて練丹法真に不老不死と黄金とを得るの二目的を有し、仙家の妙藥として抱朴子所掲のものを研究せんか丹、黄金、白銀、諸芝五玉、雲母等あり。此を今日の藥名に當て考察して興味深きものあり。九丹第一の丹華の如きは其の混合すべき八種の藥品を分析考察するに正しく黄金を得らるべしと信す。而も此等の問題は廣汎にして研究せし學者も少なく將來の進歩を

望みて止まざるものなるが、支那化學は周秦西漢より唐に亘りて漸く進歩し唐以後は衰微したるが如きも、我が邦は古來未だ全盛時代と認むべきものこれなし云々。

次で十分間休憩中評議員の改選を行ひ、再び講演に移る。

一、毛皮國本の國家 文學博士 坪井九馬三君

毛皮國本とは毛皮を以て國家維持の基とする意にして、此の種國本の國家に就ての研究は未だ重視せられざるも、世界の廣き舞臺に立ちて概觀すれば、北米大陸の加奈陀、亞細亞の露西亞の如きは其の適例なり。加奈陀の地勢は河筋亂れて湖沼多く、聯絡複雜を極むるに雖も、之れを大觀すればセントローレンス水脈、サスカチアン水脈、マッケンチー水脈の三大部を區分し得べし、而してセントローレンス水脈方面にては佛國のシヤンホランの經營し初めて以來、専ら毛皮採收を目的とする一商事會社は愈々其勢力を擴張し、又結婚政策を以て土人を懐柔したる爲め、佛人の勢力半減して接ぐべからざるに至りぬ。蓋し今日の加奈陀住人の大部分は皆此の混血兒を祖とする云ふべきものならん。然るに此の競争者として同じく佛人の經營に係り而も英國の保護を受けたるハドソン灣會社起り來り、サスカチアン水脈を占領し、次で起りしノースウエストコムパニーと合同し、金加奈陀經營に當り、營利會社として經營せし結果は今日の事情となりしものにして、

其の源は何れも毛皮採拾の目的より出でたるものなり。次に西伯利亞も亦同じく、一六四九年以來毛皮商人の力によりて開發せられ、ロシアアメリカ合資會社の發展するや、外交員の一人なる、ザノフ専ら會社の方針を立て、南下の策を廻らし、遂に我邦の交渉をも惹起し、松前島を掠め、又支那と關係を付けんとして益々西伯利亞の富源開發をつこめたり。これが動機も亦毛皮採取にありしものにして、奈加陀と共に毛皮國本の國家たるを失はず云々。右終りて有志晚餐會を催し、午後八時散會せり。尙評議員改選の結果、今西龍、羽田亨、原勝郎、濱田耕一、富岡謙藏、小川琢治、内藤虎次郎、桑原隲藏、坂日島、三浦周行(いろは順)の諸氏當選就任せり。

● 讀史會

例會 昨年九月廿七日午後六時より學生集會場にて開會、出席者三浦、喜田博士、西田、清原、江馬、魚澄、牧、宮森學士、桑原鈴木、橋川、岩橋の諸君。左の講演あり。

圖像の上より見たる淨土眞宗の聖德太子 橋川正君

藤原末期より鎌倉時代に亘りて盛んに製出せられたる變態曼荼羅の中に聖德太子の影像を描けるものあり。聖皇曼荼羅、南無阿彌陀佛作善集に見ゆる厨子一脚中の曼荼羅及び東京帝室博物館に

藏する釋迦三尊十六羅漢圖等これなり。淨土眞宗に依用せられし光明本尊もこれに類似し、その左方に太子眷屬の圖像あり。漸次變化して今日見るが如き一定の形式をこるに至りしなりとて、尊號眞像銘文改邪鈔辨述名體鈔存覺上人袖日記等を引用し、一々寫眞につきて説明せらるゝ所あり。

丹後熊野郡史蹟調査談

西田 講帥

丹後熊野郡は交通不便なる地なれども歴史研究上注意すべきもの少なからず。久美濱古はく久美莊といひ成相寺に藏する正應田敷帳にも既にその名見ゆたり。この邊には現に丹波道主命の姐川上摩須良の出でし地と云ふ川上卿ありて之に關する傳説を有し、又宮石濱は石器時代遺蹟として已に名あり。石器土器と共に、又貨泉貞觀大寶皇宋通寶等の出土をも見たり。久美谷神野村に存する古墳の如き甚だ大なるものにして考案上注目するを要す。海士村には邸址と稱する地ありて、海士直の居住したりと處と傳ふ。下佐濃村圓頓寺には古來秘佛として傳ふる樂師三尊の木像あり、藤原期の作に係る優秀なるものとす。寺には又藤原期の懸佛三枚嘉應二年の銘ある經筒等を藏す。これ等の遺物は一般文化の地方的發潤といふ見地より看過すべからざるものなり。次に久美濱本願寺は淨土宗に屬し鎌倉初期の建築に係る本堂あり、この寺には古來千體佛なる彌陀像を傳へ、征韓の當時一體百疋宛にて將士の

守本尊として頒與せられたる傳説ありとて關係文書其他寫眞につきて一々説明せられたり。

朝鮮旅行談

三浦 博士

今夏は二旬餘に亘りて全羅南道慶尙南道の沿岸地方及び島嶼を調査し、智異、伽耶二山に史料を採訪し、高靈の遺蹟を踏査せり。智異山双溪寺は碧巖の再興にして、其山林は燕谷寺のそれと共に栗樹を栽るゝに適し、李氏朝鮮の時栗木の封山たりしかば、所藏の文書にも其の制度に關するものあり。同華嚴寺は華嚴宗の古刹にして、最も多く新羅時代の遺物を存し、亦碧巖の再興に係る覺皇殿四壁の古經（華嚴經）は新羅のものにして、壬辰の役に破壞せられたりといふも、その破片の現存するもの少なからず。此の寺の文書には義僧軍に關するものあり、それは宣祖に親任を受けたる清虛が僧軍を組織したるに起源し、爾來山備の警備修築より殿舎の造營に迄發せらるゝことなれり。記録としては中觀の華嚴寺事蹟は李氏實錄を偲ぼしめ、仁祖の碧巖に給へりといふ箇亦工藝美術の逸品なり。泉隱寺に藏する碧巖の肖像は肖像畫の標本となすべし。次に伽耶山海印寺の有名なる高麗板大藏經は、初よりこゝに在りしに非ざるも、後、寺の藏經閣に架藏せられ、室町時代に於ける日鮮行通の媒介者たりといふも過言にあらずとて、高麗板大藏經其他拓本等を示されたり。

乞食につきて

喜田 博士

賤民の研究は興味あるものにして、地方によりて乞食を勸進さ呼ぶが如きは遊行僧との關係を偲ばしむ。萬葉集第十六卷に收むる乞食者の歌もその内容より見る時は今日の乞食とは少し異り漁獲に従事する浮浪人なるが如し。現に東北地方にて乞食をホヒトと呼ぶは、その語ホカヒビトより出づ。ホカヒはホグより出で、人のために祝言をのべて物を乞ふもの即ちホヒトなり。かゝる浮浪人の男子が傀儡子にて女子が遊女なり。又乞食をカタイと呼ぶは從來路傍に在るより説明せんぞすれども、特殊部落が普通村はづれ土手下山麓河原等にありて村落の傍にあるより名づけられたるにあらざるか。

例會 十月四日午後六時より學生集會場にて開會、出席者三浦博士、西田講師、清原、江馬、中村、魚澄學士、桑原、鈴木、橋川、源、岩橋の諸君。本年度の大會及び旅行に關する協議に刻を移し、終つて左の講演あり。十時散會せり。

野 牛

岩橋小彌太君

通航一覽所引の長崎祕記唐津藩開役風説書等を見るに牛と共に野牛の名を擧げたり。此の野牛に就きて言海には「牛ニ似テ小キモノ舶來ス」といふのみにして要領を得難し。然れども文祿慶長

以下諸版の伊曾保物語に徴せば野牛の「やぎ」なること明白なり。次に「やぎ」に就いて本艸書類及び諸辭典類に見ゆる所を紹介し「やぎ」の語源は羊の支那音より來りしものにして野牛は其の轉訛なるべく、而して山羊は南蠻紅毛より輸入されしとするよりも支那より舶載したりとすることが事實に近かるべし云々。

支那學會

例會 大正七年十月十九日午後六時より文科大學第九教室にて開會、狩野、内藤、桑原、高瀬教授、鈴木、今西、羽田助教以下學士學生等二十名左の講演あり。午後十時散會せり。

王士禎趙執信兩家の詩說に就て

神田喜一郎君

先づ清朝初期の作家として所謂錢吳王朱爾施北宋の稱ある六人の事より王漁洋趙飴山の學歴を説き、趙氏の王氏に反對せし理由及び王の詩に對する主張は神韻趙は性情にありと言及せり。

新羅の文士崔致遠に就て

今西助教

新羅末の文士として重視すべき理由をば高句麗百濟の文運の狀と新羅のそれとの比較論より述べ、唐書藝文志に三國の唯一人として名を留め得たる榮名に及び、遺著としては中山覆篋集、桂苑筆耕、四六文、文集、帝王年代曆、法藏和尚傳、智異山華嚴寺事蹟、眞鑑禪師碑、朗慧和尚碑、知證大師碑、初月山崇福寺碑等あ

るも、其の多くは逸亡し、彼の末路も亦行方不明にして、一種の神仙傳説となり終りしことを辨述せり。

例會 大正七年十一月二十二日午後七時より文科大學第九教室にて開催、狩野、内藤、高瀬諸教授、羽田、今西助教以下三十人、左の講演ありたり。

五穀思想管見

文學士

那波利貞君

禮記周禮以下諸子百家の記載に見ゆる五穀説を列擧して、更に櫻粟梁の時代によりて其の意味に變遷ありしことに説き及び、所謂五穀思想は恐らくは西周時代に北支那にて發生せしものにして、東周以後南方支那と關係の密接なるに及び、南方にて重視する稻を加へて從來の五穀説に一變を生ぜしなるべきを論じたり

卜筮論

高瀬 教授

卜筮の二者は支那に於ける不可思議なる決疑法なるが、就中筮は所謂三十六變筮法、十六變筮法、六返筮法、略筮法の四種あり其の所謂略筮法なるものは我が國にては新井白蛾、眞勢中洲の諸氏専ら唱導する所、蓋し京房の説に基くなるべし。而して尙書洪範の記載等により支那人の所謂鬼神に質すとは即ち卜筮によりて天意の存する所を知るの意ならむかを述べたり。

●石田梅巖の祭典と遺物展覽

石門心學の開祖石田梅巖の流を汲める京都に於ける發會は御幸

町三條下る上河氏宅に於て、富岡、杉浦、上河の諸氏主唱の下に梅巖の百七十五回の正忌にあたる去る九月廿四日を以て、昨秋恩命に浴せし贈位奉告祭典を執行し、次で當日并に其翌廿五日の兩日を以て遺物の展覧を行へり。其陳列品中主なるものを擧ぐれば、梅巖に關しては、梅巖諸像は最も確實なるもの、「石田先生事蹟」の如きも數種あるが、其中には門人杉浦止齋、富岡以直が梅巖二十五回忌の如きの編纂に係る稿本あり。其他梅巖先生遺著廿五冊書簡集三卷等あり。又梅巖の師たりし了雲に就いては其の遺著として、謠曲に註釋を施せる書の如きは未だ世に知られざるもの、其外石門の高足として手島和巷同堵菴、上河淇水、富岡以直、杉浦止齋等に關するものありて、肖像遺稿、筆蹟、或は其手になる畫幅の如き珍奇のもの尠からざりき。

●京都沿革史料展覽會

伊勢神宮所屬徵古館に於ては、豫てより兩宮を中心として宇治山田市、并に其の周圍なる宮川以東の舊神領地に關する沿革を徵すべき史料を蒐集して一般の觀覽に供し、學者の研究に資せん事を計畫したりしが、去秋是が實現を見るに至り十一月一日より十二月十日に至る四十日間京都沿革史料展覽會を開催せり。蒐集史料總數一千三百十二點、中五百二點を選び、神宮、御田祭、舊祠

官、御師、伊勢道中、山田町家、慶光院、政治、經濟、學藝文事等に類別し、兩宮御政印、正平七年外宮廳宣、外宮御田祭大廟、内宮御田祭圖、世木長官忠元畫像、慶光院周滿上人畫像、治曆元年二見御泊券、角屋船の旗、荒木田守武筆蹟等多方面に亘り有益なるものを多く陳列したり。就中御師、山田奉行、三方政治及び宇治會合、大湊、二見に關するものと御降參、伊勢首領御田祭等の風俗史料は最も觀者の注意を惹けり。尙其の出品總目錄は解説と圖版とを添へて近く公刊せらるべし。(會員大西源一氏報)

會報

例會 九月廿八日午後一時半より文科大學第九教室に於て開催左の講演ありたり。

禁裡供御人に就きて 會員文學士 中村直勝君

朝鮮併合事情 會員 小松 綠君

總會 十一月九日午後一時より京都帝國大學々生集會場にて開催
會務會計報告、評議員の改選ありて左の講演ありたり、

化學上より見たる東洋上代の文明

會員理學博士 沂重 眞澄君

毛皮國本の國家 會員文學博士 坪井九馬三君

晚餐會 總會終了後會員の晩餐會を開き、當日の講演者坪井文學博士、近重理學博士を招待し、本會評議員、委員其他有志會員等二十一名の出席ありたり。

編纂會 同月二十二日午後一時より文科大學陳列館貴賓室に於て開催濱田、三浦兩評議員以下編纂員出席編纂事務を處理し叢說欄の併合を決議せり。

●會員動靜

入 會

大分縣立農林學校内 増山 重光

(右紹介者、佐野秀俊)

東京市芝區愛宕町三ノ一 松本 信廣

(右紹介者、田中萃一郎)

和歌山縣海草中學校 吉田 寅藏

(右紹介者、本山久平)

東京市芝區三田小山町二五 飯田 忠純

(右紹介者、松本彦次郎)

東京市麴町區内幸町二丁目 井上 通泰

京都市岡崎廣道通丸太町下ル
 東京市下谷區茅町二ノ五佐藤方
 朝鮮京城府鳳凰洞三七
 大阪市南區天王寺南河堀町
 大阪市南區心齋橋一丁目
 京都市東山通松原上ル星野町
 滋賀縣栗太郡治田村

(右紹介者、三浦周行)

大阪市南區天王寺阿部野筋二丁目一九〇九

(右紹介者、森下博)

東京早稻田大學恩賜館研究室

(右紹介者、喜田貞吉)

兵庫縣洲本中學

(右紹介者、鈴木登)

京都文科大學考古學教室内

(右紹介者、濱田耕作)

臺灣臺北高等女學校

(右紹介者、羽田亨)

京都市上京區鹿ヶ谷一燈園内

(右紹介者、西田直二郎)

奈良縣吉野郡吉野山

米田庄太郎
 朝河貫一
 李能博
 森下博
 岡田播陽
 羽倉信一郎
 宇野米太郎

五條秀磨

清水泰次

若月起夫

榑原政職

楠基道

小此木忠七郎
 羽溪了諦

中岡清一

京都市御筈通七條上ル平安中學校々宅
 京都市出町相生町
 京都市鹿ヶ谷町櫻谷西田方
 和歌山市金龍寺町四

(右紹介者、那波利貞)

埼玉縣川越町上松江町

(右紹介者、梅原未治)

大阪市南區高津地藏坂

大阪市南區泉清水町

退會

齋藤多馬喜

小林大次郎

三原珍珠

死亡

甲斐重五

●寄贈交換圖書

史學雜誌、二九の二〇・二一・二二
 歴史地理、三二の四・五・六
 考古學雜誌、九の二・三・四
 經濟論叢、七の四・五・六
 國學院雜誌、二四の九・一〇・一一
 飛騨史壇、四の四・五
 東洋哲學、二五の二一
 佛書研究、四五・四六・四七

史學會
 日本歷史地理學會
 考古學會
 京都法學會
 國學院大學
 飛騨史談會
 東洋大學
 佛書刊行會

高雄義堅
 銅直勇
 原田恭助
 川上徹介
 安部立郎
 山口草平
 岡本大更